

〔論 文〕

新聞記事にみる「ら抜き言葉」

——言葉の規範意識を再考する 2——

中山 恵利子

1. はじめに一議論の背景

2021年9月に2020年度の「国語に関する世論調査」が発表された。これは文化庁が国語施策の参照とするために、平成7(1995)年度から毎年実施している世論調査である。「ら抜き言葉」に関しては1995年から5年ごとに同じ言葉を調査し続けており、2020年で6回目となる。ただし、今回の調査方法はコロナ禍のため、従前の調査員による面接聴取法から郵送法に変更されており、比較には注意が必要である。したがって、数値に関して詳細を分析することはしないが、以下の傾向は見て取れるだろう。

一般的に書き言葉のほうが話し言葉より規範に従いやすいので、郵送法により書き言葉だけで判断した今回は「ら入り言葉」の使用率がどの語においても前回より上がっている。その論理で考えれば、「ら抜き言葉」の使用率は反対に抑制されるはずであるが、「考えられない」以外の4語の使用率は前回より上がっており、定着が進んでいると言えそうである。

1995年の初回調査時に文化庁は、「大勢は『ら抜き』かもしれないが、本来は『ら』が入るのが正しい。語幹が短い言葉ほど『ら抜き』が浸透しているようだ(1995. 6. 24 朝日朝刊。傍点は筆者)」と分析し、この調査結果も根拠として、国語審議会が「共通語においては改まった場での「ら抜き言葉」の使用は現時点では認知しかねる」と報告した。しかし、2015年には「見れた」と「出れる」を使う人数が「見られた」「出られる」を初めて超えたという理由で、文化庁の担当者は「ら抜きは可能表現だと的確に伝わるからではないか。多くの人を使い、耳慣れることで、さらに使う人が増えている。どちらが正しいとは言えない(2016. 9. 22 読売朝刊。傍点は筆者)」とした。そして2020年の今回は書き言葉による調査にも関わらず、「見れた」と「来れますか」を使う人が「見られた」「来られますか」を抜いており、文化庁は「語彙の変化

表1:「ら抜き言葉」の使用率「あなたが普通使うものはどちらですか」

| | 2020 | 2015 | 2010 | 2005 | 2000 | 1995 |
|-----------------|------|------|------|------|------|------|
| 今年は初日の出が見れた | 52.5 | 48.4 | 47.2 | - | - | - |
| 今年は初日の出が見られた | 46.2 | 44.6 | 47.6 | - | - | - |
| 早く出れる? | 48.1 | 45.1 | 44.0 | - | - | - |
| 早く出られる? | 50.5 | 44.3 | 48.0 | - | - | - |
| 朝5時に来れますか | 52.2 | 44.1 | 43.2 | 35.4 | 33.8 | 33.8 |
| 朝5時に来られますか | 46.4 | 45.4 | 47.9 | 52.7 | 54.2 | 58.8 |
| こんなにたくさんは食べれない | 33.4 | 32.0 | 35.2 | 26.6 | 25.5 | 27.2 |
| こんなにたくさんは食べられない | 65.2 | 60.8 | 60.2 | 66.7 | 67.7 | 67.3 |
| 彼が来るなんて考えれない | 4.9 | 7.8 | 8.1 | 5.7 | 5.9 | 6.7 |
| 彼が来るなんて考えられない | 93.8 | 88.6 | 88.2 | 89.3 | 88.7 | 88.8 |

出所) 文化庁 令和2年度「国語に関する世論調査」の結果の概要より

の途上にあり、一概に誤りとまでは言えない」(2021. 10. 5 読売朝刊。傍点は筆者)と話すまでになっている。かなり慎重に発言しているが、「正しさ」において「誤りとは言えない」のであれば、「正しい」ということになるのではないか。

このように、「ら抜き言葉」は今現在も使用率が変化し続け、それに伴い文化庁の正しさの判断が揺らいでいる言葉である。文化庁は教育上の基準を示さねばならぬ立場であるがゆえに正しさに言及せざるを得ないのであろうが、言葉は変化するものであるため、その正しさは普遍的なものではない。例えば、もともとあった言葉と新たに生まれた言葉が併存する「揺れ」の期間を経て、使用者が多いほうが容認され、少ないほうが自然淘汰される、というように変化するものである。しかし、「ら抜き言葉」はこれまで「揺れ」として認識されるより、「乱れ」の代表格として批判的となることのほうが多かった。「乱れ」というのは、第20期国語審議会によれば、客観的に変化をとらえる「揺れ」とは異なり、規範から逸脱しているという主観的な価値判断の入った言葉である。変化している言葉は数多くあるにもかかわらず、なぜ「ら抜き言葉」が「乱れ」の代表格とされてきたのであろう。

本稿では、言葉の規範意識について考えるための一つの方法として、「ら抜き言葉」に対する一般の人々の批判を分析し、以下の点について考察したい。

- ①「ら抜き言葉」に対する人々の批判がどのような根拠に基づいているか。
- ②批判の対象は誰で、どのような批判なのか。
- ③批判の対象者は批判に対し、どのように対応しているのか。

2. 新聞記事の概要

2-1 記事の採取方法と記事数

研究者や有識者の意見はその著書や論稿からも知り得るが、一般の人々の意見を広く採取するために、新聞記事を利用することとした。データベースは、三大紙とされる朝日、毎日、読売各社のデータベースと「ことばに関する新聞記事画像データベース」を用いる。「ことばに関する新聞記事画像データベース」とは、50年と限られてはいるが、比較的早い時期の新聞記事から言葉に関する記事のみを採録しており、国語関連の新聞記事検索には欠かせないデータベースである。

「朝日新聞聞蔵Ⅱビジュアル」(1985年¹⁾～)

「毎日新聞記事検索」(1872年～)

「読売新聞ヨミダス歴史館」(明治・大正・昭和1874年～1989年)(平成・令和1986年～)

「ことばに関する新聞記事画像データベース²⁾」(1949年～1998年)

新聞三社のデータベースから「ら抜き言葉」「ら抜きことば」「ら抜き」「ら抜き言葉」「ら抜きことば」「ら抜き」の6語で検索を行った結果から、例えば「～から抜き取る」のような「ら抜き言葉」に関するものではない記事や、重複する記事を除いた。また、「ことばに関する新聞記事画像データベース」に掲載されている新聞三社の記事は、新聞三社のほうに統一した。さらに、検索して得られた記事に「○月○日付け

表2：新聞紙別記事数

| データベース | 聞蔵 | 毎日 | ヨミダス | ことばに関する新聞記事 | | | 合計 |
|--------|-----|-----|------|-------------|---------|-----|-----|
| | | | | 東京 | 産経・サンケイ | 西日本 | |
| 新聞社名 | 朝日 | 毎日 | 読売 | 13 | 8 | 1 | 517 |
| 記事数 | 164 | 161 | 170 | | | | |

* 「ことばに関する新聞記事画像データベース」の記事数は新聞三社分を除いたものである。

の記事で」というような記述があり、その記事が「ら抜き言葉」に関する内容を扱っているにも関わらず、検索から漏れている場合は加えるということもした³⁾。その結果、517本の記事が得られた。

むろん「ら抜き言葉」に関するすべての記事が採取できたわけではない。「ら抜き言葉」という用語自体が1980年代に生じたとされている⁴⁾ため、検索語に用いた時点で、「ら抜き言葉」という用語誕生以前の、「見れる」「食べれる」といった現象に関する記事の採取は不可能となるからである。「ら抜き言葉」という語が生まれた後でも、記事の中に「ら抜き言葉」等を使っていなければ、やはり検索からは漏れる。

ただし、表3に見るように、1960年代や1970年代の記事も採取している。これは、「ヨミダス歴史館」と「ことばに関する新聞記事画像データベース」(1949年～1998年)から採取した記事である。「ヨミダス歴史館」は「ら抜き言葉」という単語が記事に使われていなくても、その記事に記載されている現象が「ら抜き言葉」に関するものであれば、「ら抜き言葉」等で検索できるようになっている。また、「ことばに関する新聞記事画像データベース」は、ことばに関する記事を集め、検索等ができるように加工した二次的なデータベースであるため、「ヨミダス歴史館」同様に、「ら抜き言葉」という語によっても検索ができるようになっている。したがって、「ら抜き言葉」という表現が生まれる前の記事も拾えるのである。しかし、この2つのデータベースで検索できる記事は1949年から1998年の間においても完全に一致するわけではないため、双方ともに取りこぼしている記事が存在することがわかる。

新聞三社のデータベースの記事採取期限は2022年2月28日とした。新聞三社の記事数は164、161、170本とほぼ同じであると言える。年代ごとの記事数の分布についても似通っている。1960年代から2020年代まで年代ごとに表3にまとめたが、通時的に比較はできず、おおよその傾向を見るだけである。というのも、朝日新聞社のデータベースの始まりが1985年と1980年代半ば過ぎであるため、1980年代は10年分のデータが揃っておらず、それ以前については先述したように既に得られている記事から遡り追加したもの、「ことばに関する新聞記事画像データベース」から採取したもの、しかないからである。また、毎日新聞も「ら抜き言葉」という用語が浸透してからの記事しか検索できず、それ以前の記事については朝日新聞と同様であるからである。したがって、新聞三社の10年分の記事が揃っているのは、1990年代、2000年代、2010年代となる。

1990年代は「ら抜き言葉」に関する記事が多く、2000年代の1.8倍、2010年代の3倍弱に上る。これは、1992年に当時の総理府(現内閣府)による世論調査の実施、1995年に文化庁による『国語に関する世論調査』が始まり、その中に「ら抜き言葉」に関する設問があったこと、1993年と1995年の第19期と第20期の国語審議会報告の中で「ら抜き言葉」に言及があったことなどが理由だと考えられる。

表3：年代別記事数

| 新聞社名 | 朝日 | 毎日 | 読売 | 東京 | 産経・サンケイ | 西日本 | 合計 |
|--------|-----|-----|-----|----|---------|-----|-----|
| 1960年代 | 1 | 0 | 9 | 4 | 1 | 0 | 15 |
| 1970年代 | 7 | 1 | 4 | 3 | 1 | 0 | 16 |
| 1980年代 | 10 | 8 | 18 | 6 | 6 | 1 | 49 |
| 1990年代 | 79 | 84 | 64 | - | - | - | 227 |
| 2000年代 | 39 | 41 | 44 | - | - | - | 124 |
| 2010年代 | 27 | 25 | 25 | - | - | - | 77 |
| 2020年代 | 1 | 2 | 6 | - | - | - | 9 |
| 合計 | 164 | 161 | 170 | 13 | 8 | 1 | 517 |

2-2 記事の分類基準

まずは、517本の記事がどのような流れで意見を書いているかについて、以下の基準に従って分類した。

否定の「部分肯定」と肯定の「部分否定」は同じことのように思われるかもしれないが、最終的に筆者が「ら抜き言葉」を受け入れているか否かによって判断した。これは人により判断の分かれるものもあるかもしれない。以下に、それぞれの分類の代表的な例を挙げておく。記事例は、紙面の都合上要約しているが、「ら抜き言葉」に関する意見を述べている部分は可能な限り内容に忠実に要約した。なお、記事の最後にカッコ付で筆者の情報と新聞情報を記している。筆者情報は職業・年齢・在住地、新聞情報は年月日・紙名・(地方版)・朝夕刊である。筆者情報は記載の限りである。ただし、研究者以外の氏名は除いた。筆者情報が全くないものは記者や編集者など新聞社側の記事である。

【否定・全否定】

・「見れる」「出れる」「食べれる」がとても気になる。本当は「見られる」「出られる」「食べられる」なのだ。こんなに言葉が乱れた原因の一つはマスコミだろう。最近のTV番組の司会者は平気で乱れた言葉を使い、とても不愉快になる。それと、身近なところでは学校の先生方が使っている。私たちが社会人になるころには「見れる」が公用語になるのではないか。もう一度正しい日本語を見直そう。

(高校生 16歳 東京都 1981. 10. 12 東京朝刊)

【否定・部分肯定】

・私は「ら抜き言葉」を使わないようにと、ひそかに心に決めている。以前は日本語の乱れということがよく言われていたが、最近ではあまり問題にされないようである。言葉が移り変わっていくのは仕方ないことかもしれないが、自分の国の言葉を大切にしたいと思う。

(無職 61歳 東京都 1987. 1. 17 東京朝刊)

【肯定・全肯定】

・乱れていない正しい日本語とは何だろうか。言葉は絶えず変化する性質を持つ。よりすぐれた言語への変化である。「ら」を落とすことで可能と受け身を区別し、発音しやすくなるからこそここまで普及した。決して嘆くべき現象ではない。せつかくの言語の進化を乱れと決めつけるのはどんなものだろうか。(学生 22歳 東京都 1986. 3. 1 朝日朝刊)

表4：記事の分類基準と記事数

| | | | |
|-----|------|---|-----|
| 否定 | 全否定 | 自分は嫌だ・使わない・人の使用を訂正する等 | 146 |
| | 部分肯定 | 変化は分かるが、自分は嫌だ・使わない・訂正する等 | 58 |
| 肯定 | 全肯定 | 変化だ・合理的だ・問題ない等 | 94 |
| | 部分否定 | 自分は嫌だ・使わないが、変化を受け入れる・諦める等 | 39 |
| 肯否 | 複数 | 賛否両論等、1本の記事に数名の意見があるもの | 20 |
| 中間 | 半々 | 1人の中で否定・肯定で揺れているもの | 8 |
| | 中立 | 1人の意見で、肯定・否定どちらも表明していないもの | 27 |
| 対象外 | 調査等 | 調査・審議会の結果報告(報告に対する有識者や文化庁、記者の意見等がある場合は意見の内容により分類した) | 36 |
| | 導入修飾 | ら抜きは導入・修飾等で、他の言葉や現象を論じているもの | 31 |
| | 紹介文 | 書籍・演劇・入試問題など紹介等 | 52 |
| | 不明 | 川柳など、どちらにも解釈できるもの | 6 |
| 計 | | | 517 |

Oct. 2023

新聞記事にみる「ら抜き言葉」

【肯定・部分否定】

・「着れる」は本来の意味・文法的に言えば誤りであるが、「言葉は流れるもの」であり、使われていくうちに形が変わっていくのも仕方がないと思う。かといって、日本語のもつ美しさが損なわれないよう、絶えず日本語に目を向け大事にすることも大切。日本語は乱れているというより、生きて動いて変化していると考えたい。(教員 29歳 茨城県 1985. 8. 21 読売朝刊)

【複数】

・[全否定] NHK チーフアナウンサー：ら抜きは許しません。新人アナウンサーの教育の際に、ら抜き 1 回 100 円の罰金を取ったら 8000 円になったと苦笑する。[全肯定] 筑波大助教授：「られる」に可能、自発、受身、尊敬の 4 つも機能を持たせるのは過酷。「食べれる」は可能に限られる。言葉は生きもの。使い手の庶民が発明する。映画の字幕では 20 年前から使われている。この意見に賛同する人も多くなってきているという。(1993. 9. 3 朝日朝刊)

【半々】

・磐田では「見れる」では満足せず、「見れる」という。地方先行のら抜きことば、文法を無視した乱れと位置づけるか、変わりゆく「日本語の変化」と評価するか、私自身も揺れ動いている。

(1994. 1. 31 毎日夕刊)

【中立】

・毎日生の日本語を聞いている生徒は、ら抜きでない言葉に抵抗を感じることがある。

(日本語学校講師 29歳 東京都 2003. 10. 27 読売朝刊)

【対象外】肯定・否定の意見が書かれていないもの、また、どちらなのか不明なもの。

(1)調査等

・第十九期国語審議会が最終報告をまとめた。いわゆる「ら抜き問題」などに代表される日本語の揺れの問題は第二十期国語審議会で検討すべきテーマに追加した。委員の間では、ことばの乱れとみるか、揺れとみるかで意見が分かれた。(1993. 6. 9 毎日朝刊)

(2)導入・修飾等

・ら抜きことばへの賛否が様々であるように時代と共に変化していく言葉の判断は難しい。

(1995. 12. 25 朝日朝刊)

(3)紹介文

・『東京ことば』という自社出版の本の紹介文：「見れる」などの「ら抜き言葉」の項は、自分自身はどうかを確かめながら読むと一層興味深いのでは。(1988. 7. 7 読売夕刊)

(4)不明

・よもうり時事川柳テーマ「学校」：先生もら抜き言葉で話してる(府中 2018. 8. 7 読売朝刊)

最後の「不明」は、解釈の仕方では「否定」に分類できると思う人もいるだろう。これらは作者の意図が判断できなかったものである。「先生もら抜き言葉で話してる」は、生徒の範となるべき先生も乱れた言葉の話している、と「ら抜き言葉」も先生も(もしかしたら「い抜き言葉」を使う生徒をも)否定していると考えられる一方、2018年の作品であるため、「ら抜き言葉」も一般化しており、今では先生も普通に話しているよ、と現状を客観的に詠んでいるとも考えられる。さらに言えば、「ら抜き言葉」を使う生徒に囲まれていると先生も思わず使ってしまうよと、その状況をほほえましく肯定的に受け取っているとみることもできなくはない。解釈を決定づける情報がないため、「不明」とした。

以上の基準にしたがって記事を分類した結果を表4の右欄に掲載した。これを見ると、「否定」記事は「全否定」146本、「部分肯定」58本合わせて204本、「肯定」記事の合計は133本となり、「否定」記事のほうが約1.5倍多いことが分かる。

2-3 意見の分類結果

次に、記事数ではなく意見数を見てみよう。表4で「複数」と分類した記事は、1つの記事の中に何人かの意見が含まれているものであるため、記事を解体し、複数の意見をそれぞれ分類基準に従って分類し直した。例えば、1つの記事に3人の意見が書かれていて、それぞれの意見が「全肯定1・部分肯定1・中立1」という場合には、それぞれの分類に1件ずつ加えた。その結果が表5である。なお、表5からは、解体した「複数」の記事20件と、「対象外」(1)調査等、(2)導入・修飾等、(3)紹介文、(4)不明の記事125件は除いている。意見数は記事数より増えるが、除外した記事があるため、全体数は517件から430件に減る。

表5における「否定」と「肯定」の比率をみると、どの年代も「肯定」より「否定」のほうが多い。1990年代は「肯定」意見も「否定」意見に迫る勢いであるが、それ以外は水をあけられている。新聞に投書するという行為は現状を憂えるという心理状態が動機づけになることが多いからなのかもしれない。1990年代に「肯定」意見が増えたのは、世論調査に対する文化庁の分析や国語審議会報告が「ら抜き言葉」を「誤り」「(限定的に)認めない」としたことに對して、今度は肯定派が憂えて反論したからであろうか。また、2000年代、2010年代になっても「否定」意見の割合がさほど減っていないのは、表1で見たように「ら抜き言葉」の使用率が徐々に高くなってきている状況を憂えてのことだと思われる。

しかし、2010年代の「否定」はそれまでの年代とは異なり、「ら抜き言葉」を一方的に糾弾する全否定の意見は減り、例えば「変化は分かるが、自分は嫌だ、使わない、訂正する」という、「否定」は「否定」でも部分的には肯定する意見、否定の「部分肯定」の割合が増えている。これは、「ら抜き言葉」への評価は別として、言葉が変化するという事を受け入れる人の割合が増えている⁵⁾からであろう。

3. 新聞記事にみる否定意見

ある言葉について「否定」か「肯定」かの判断をするとき、人はどのような「理由」で判断するのか、また、その「理由」の裏づけとなる「根拠」があるのか、表5に掲載したすべての記事について「理由」と「根拠」を洗い出してみた。ここで「理由」というのは、主観的・客観的に関わらず、なぜ「ら抜き言葉」を否定するのか、肯定するのか、である。「根拠」はその理由を裏付けるよりどころ、判断の元となるもの、である。

記事には根拠が書かれていないものもあれば、その根拠が複数にまたがっているものもある。否定の「部分肯定」や肯定の「部分否定」「半々」に関しては、もともと1人の意見の中に相反する複数の意見(例えば否定の「部分肯定」では、「変化はわかる(肯定)が、嫌いだ(否定)」など)があるので理由や根拠が複数になるものもある。理由や根拠の数に言及する場合は、多い・少ないという大まかな表現を使うこ

表5：意見の分類結果

| | 否定 | | 肯定 | | 中間 | | 計 | 否定の割合 % | 肯定の割合 % |
|--------|-----|-----|-----|-----|----|----|-----|------------|------------|
| | 全 | 部分肯 | 全 | 部分否 | 半々 | 中立 | | | |
| 1960年代 | 9 | 2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 15 | 73.3 | 20.0 |
| 1970年代 | 10 | 0 | 4 | 0 | 0 | 2 | 16 | 62.5 | 25.0 |
| 1980年代 | 25 | 11 | 8 | 5 | 1 | 6 | 56 | 64.3 | 23.2 |
| 1990年代 | 63 | 25 | 62 | 24 | 2 | 11 | 187 | 47.1 | 46.0 |
| 2000年代 | 38 | 12 | 20 | 7 | 3 | 5 | 85 | 58.8 | 31.8 |
| 2010年代 | 17 | 14 | 15 | 7 | 2 | 10 | 65 | 47.7 | 33.8 |
| 2020年代 | 3 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 6 | 50.0 | 33.3 |
| 計 | 165 | 64 | 110 | 47 | 9 | 35 | 430 | 53.3 | 36.5 |

ととする。

3-1 否定意見の理由と根拠

ここでは、否定意見を理由や根拠に従って分類した結果、圧倒的に多かった2つを取り上げる。また、その否定意見に反論する肯定意見や、関連のある参考意見も併せて記述する。

3-1-1 正しさ

A：否定意見「正しくない・誤りである」等 根拠：学校文法

「ら抜き言葉」を否定する意見の中で多く見られる理由は「正しくない・誤りである」等である。この理由の根拠は学校文法(教科書)であり、「ら抜き言葉」は学校文法では認められていないため、「正しくない」等と判断していると推測できる。しかし、記事には学校文法に言及していないものも多く、中には「ら抜き言葉」そのものを間違えているものもあることから、記事の筆者全員が学校文法を理解し、それを根拠としているかという点については不明である。根拠が明記されているものは少ないが、記事の中に「正しくない・誤りである」等といった言葉がある場合はここに分類した。

以下、「ら抜き言葉」が正しくないとする意見を年代ごとに1記事ずつ掲載する。

- ・NHKテレビ「おはなはん」で「これなくて」と言っていたが「これなくて」が正しいことば。このころはアナウンサーでさえ「見れなくて」と「ら」を抜いたりする。なるべく正しいことばを使ってほしい。(東京都 1966. 10. 8 東京朝刊)
- ・昭和30年代に著名なタレントが盛んに連発していた。野火のように大手を振って汚染して回った。「出られる」が正しいと私は言いたい。「出れる」など地方の一部方言に過ぎなかったのではないか。四段動詞以外の動詞には「られる」がつくきまりになっている。放送関係も、学校も家庭も国立国語研究所も、出演者自身も、われわれもとくと考えるべきことではあるまいか。(劇作家 1976. 10. 9 朝日朝刊)
- ・言葉が乱れるのは若者だけのせいではない。ラジオやテレビで大人が「見れる」などを使い、私たちは悪い言葉、乱れた日本語を学ぶ。教科書を見直し、活字を口で読めば、正しく使えるようになるのでは。日本語は美しい。美しく使おうではないか。正しくない言葉を使うと心まで乱れてくるし、自分が下等な人間にみえてくるのだからおかしい。(学生 22歳 埼玉県 1977. 7. 10 読売朝刊)
- ・日本語が大いに乱れている。特に「食べれる」「出れる」といったたぐいの言葉は、「ら」が入るべきだ。誰も間違いだと思わないのだろうか。世界中でも美しいとされる日本語を日本人自らが乱れているのは悲しい。機能性だけを重視するのではなく、その言葉の持つ独特の響きや温かさにもっと目を向けるべきだ。(予備校生 19歳 千葉県 1987. 10. 27 サンケイ朝刊)
- ・日本語の乱れが気になる。一般の人でもテレビのコマーシャルや広告文にも。会話で特に感じるのは文法上の誤り。「見れる」「着れる」と言いならわしている人が多いようだ。確かに言葉は生き物で、その時代に連れて変化するものもあるかもしれない。しかし、やはりかたくなに守り通すべきものの中にはあっていいのではないだろうか。(会社員 43歳 愛知県 1990. 11. 17 毎日朝刊)
- ・ら抜き言葉は文法的に間違っていると思う。多くの人が使っているから市民権を得るだろうという意見には反対だ。いくら使われているからといっても、強い抵抗を感じるからだ。第一不自然ではないか。口にして耳にして違和感を覚える。昔からの言葉遣いを大切にしてもいいのではないか。
(中学生 14歳 東京都 2005. 7. 14 読売朝刊)
- ・最近テレビに出る人はアナウンサー以外は「出れる」「見れる」とら抜き言葉で話しているが、正しい用法と認められているのだろうか。番組を仕切る人には、正しい日本語を使って、出演者に自覚を促してほしいと感じるのは古いのかな。(無職 68歳 神奈川県 2011. 8. 11 読売朝刊)

- ・ SNSを通してネパールに住む男性と知り合い、日本語を教えるようになった。彼は私が正しい日本語を使っていると信じて言葉遣いをまねる。私は正しい日本語を伝える責任を感じるようになった。その後、「ら抜き言葉」や略語を使うのをやめ、古典や名作を読んだ。外国人との出会いが日本語の美しさを知って学び直すきっかけになった。(高校生 17歳 岩手県 2021. 7. 27 読売朝刊)

学校文法を根拠とすれば、学校文法に記載のない「ら抜き言葉」が間違いだと思えるのは容易に理解できる。文法上正しくないという「ら抜き言葉」の反対概念は「正しい日本語」であり、「正しい日本語」を話すようにしたい/してほしい、とする意見が多いが、「正しい日本語」のほかに「美しい日本語」といった表現や「日本語が乱れている」という表現が見られる。「ら抜き言葉」が美しくないとするのは個人の感覚であり、日本語が乱れているとするのは主観的な判断であり、これらは3-1-2の「感覚」にも分類できる意見である。

この「正しくない」という意見に対し、そもそも学校文法そのものが正しくないとする意見や、言葉に正しいも正しくないもないとする意見がある。その多くは研究者の見解となるが、「ら抜き言葉」の肯定意見として以下にまとめる。

B：肯定意見

①学校文法を否定する意見 根拠：日本語(国語)研究・日本語(国語)学者

- ・ 言語に規範は必要ない。誤りはない。学校文法では「見られる」と教えるが、国語学者は「読める」と同じ可能動詞だと認識している。(1978. 6. 13 朝日夕刊)
- ・ ら抜きは正式な言葉に認知していい。文語から口語へ向かう過程でラ行音が落ちる傾向があり、自然な現象。学校文法は文法ではない。史的観点が欠落している。(杉本つとむ著『市民のための国語の授業』からの引用)(2007. 7. 15 読売朝刊)

②「言葉の正しさ」を否定する意見 根拠：言語変化

- ・ ことばの乱れは心ある人は誰も恐れているが、「時の流れの怒涛」を防ぐことは不可能である。正しさは変化するので、主観的判断にすぎない。会話のことばは国語の教科書とは違う。話す人の個性と時代の背景を映す。(斎藤風勢夫 俳句研究者 1976. 11. 4 朝日朝刊)
- ・ 乱れていない正しい日本語とは何だ? 言葉は絶えず変化する性質を持つ。よりすぐれた言語への変化である。可能と受け身を区別し、発音しやすくなる。だからここまで普及した。嘆くべき現象ではない。せっかくの言語の進化を乱れと決めつけるのはどんなものだろうか。

(学生 22歳 東京都 1986. 3. 1 朝日朝刊)

- ・ 文法とは言葉の解釈に過ぎない。正しいか否かの議論は意味がない。新たな動詞と考えれば文法的にはすべて正しくなる。美しいか否かの議論は感覚的な問題で、最終的には好き嫌いの問題になる。ら抜き言葉は数十年かかって浸透してきた。可能をら抜きにするのは合理的だ。

(佐竹秀雄 国語学者 1995. 11. 6 読売大阪夕刊)

- ・ 言語学者の仕事は、言葉がどう変化していくかを観察すること。指針を示す役ではない。そもそも正しい日本語など存在しない。「ら抜き言葉」も変化を感じるだけで乱れとは思わない。話し言葉では気にならない。ただ、書き言葉で使われると気になる。定着度がさらに進んだと感じるからだ。「正しい日本語」より「言葉の本質を受け取る」ことが大事だ。(金田一秀穂 杏林大教授 2017. 1. 13 毎日朝刊)

C：参考意見

①学校文法に関する文化庁の見解 根拠：使用率

「1. はじめに」で説明したとおり、文化庁は1995年、2015年、2020年の世論調査後にコメントを出し

ており、「ら抜き言葉」に関しては「本来は『ら』が入るのが正しい」から「どちらが正しいとは言えない」、さらに「一概に誤りとまでは言えない」と変化している。

「学校文法にないから『ら抜き言葉』は正しくない」とする意見を持つ人々は、この文化庁の見解をどのように受け止めているのだろうか。管見の限りでは、2015年の「どちらが正しいとは言えない」という見解に対する記事が1件あるのみである。

- ・「ら抜き言葉」が広く使われるようになり、不快感を覚えている。文化庁の調査分析は「ら抜きの方が可能の表現だと的確に伝わるからではないか」などという。冗談ではない。現代はただでさえ変な流行語が使われ、言葉を省略する傾向があり、日本語は大いに乱れている。言葉は時代とともに変わるといってはへりくつだ。歴史ある美しい文法を無視し、勝手な使い方をしたなら、日本語は滅びかねない。正しい日本語は幼児の頃から教えるのがいい。学校の授業で厳しく指導すべきだ。ら抜き言葉一掃キャンペーンをするぐらいの意気込みがほしい。(無職 78歳 千葉県 2017. 2. 15 読売朝刊)

②学校文法の必要性 根拠：教育における基準の必要性

文化庁の見解が揺れ出すと問題が生じるのは基準を必要とする教育現場である。

- ・区別ができていいという一方すべてがら抜きになっているわけではないという意見もある。動いている状態である。言葉が変化することと基準を考えることは別だ。外国人や子供に基準は大切だ。

(水谷修 62歳 国立国語研究所所長 1995. 11. 28 読売朝刊)

3-1-2 感覚

A：否定意見 「嫌いだ・耳障りだ」等 根拠：個人の好み

ここでは、「ら抜き言葉」は「嫌いだ・耳障りだ・気になる」等が入る。個人の感覚や感情が理由となっており、根拠はその人の好みと言えよう。「文法的に正しくないから嫌いなのだ」という意見も含まれているかもしれないが、記事を読む限り、正誤ではなく感覚や感情を表す言葉が並ぶものをここに分類した。また、前節でみたように、正誤にも触れた上で、感覚や感情を表す言葉を使っている記事は、複数の理由を持つ記事としてそれぞれに分類している。この「感覚」に分類した記事は、他の理由との重複も少なくないため、数としては最も多い。

- ・「あそこに車は置けないよ」と面白い日本語を耳にした。よく言われる「着れる」「食べれる」には不感症になっていたが、「置ける」には鈍い私も拒絶反応を起こす。このような日本語の乱れを防ぐために、文化政策が必要。マスコミ言語文化を放置して国語教育にのみ役目を負わせても徒労に帰するであろう。(教員 24歳 東京都 1969. 1. 5 朝日朝刊)
- ・品がなく、略式に聞こえたので使わなかった。今でも決して使わないが、理由は誤りだからというより、響きが嫌いだから。乱れは言葉が社会とともに生きていることの証であり、あとは個人の美意識がこだわりを作るのだろう。(キャスター 1988. 9. 6 朝日朝刊)
- ・日本語に少しでも見識を持っている人ならば、「ら抜き言葉」に嫌悪感をおぼえていることだろう。

(1999. 2. 14 読売朝刊)

- ・「ら抜き言葉」は耳障りで、内容など聞きたくないと思うほど。電波で流され定着するのを憂う。美しい日本語を使ってこそ内面の美が備わると思う。(主婦 60歳 千葉県 2000. 3. 31 朝日夕刊)
- ・ら抜き言葉に耐えられない。学生時代に肯定する友人と激論になったこともある。テレビで使っていたら消したくなる。仲良くなった友人が使えば「この程度の人か」と軽蔑してしまう。息子の学校の先生も使っていて愕然とする。息子も嫌だと言っているが、子供が敏感になりすぎるのも教育上よくないと不安を感じる。(主婦 30代 東京都 2002. 3. 9 読売朝刊)
- ・「ら抜き言葉」を使うのは生き方がフワフワしているから言葉も軽薄。昔は本を読んだが今は漫画。だ

から漫画みたいな話し方になっている。(元アナウンサー 63歳 2004. 2. 20 読売夕刊)

- ・夜のニュースで、政府高官がら抜き言葉で話していた。字幕にはらが入っていて、余計に音声のら抜きが強調されてしまう。とても知的に見える、一流大学卒業だろう立派な方も、これでは台無しだな、恥ずかしいなと思ったが、すぐにこれは他人事ではないと気を引き締めた。

(落語家 2008. 10. 23 朝日夕刊)

- ・若者はともかく相応の年格好の人が「ら抜き」で話すのを聞くと、上品でないと思う。

(コラムニスト 53歳 2009. 2. 15 朝日朝刊)

- ・変化は重々承知だが「ら抜きことば」はなじめない。テレビから聞こえてくるたび画面に向かって文句を言う。街頭インタビューで年配の方も使うことが少なくなき、残念。授業参観では40代の国語の教師が「見れる」と平気で使い、うんざりした。授業を見る気がなくなり、途中退席した。ら抜き言葉の浸透を防ぐことは不可能だろう。自分が使わないことくらいしか策がないのが残念だ。

(主婦 53歳 山口県 2012. 3. 23 朝日朝刊)

まず目につくのは、話し言葉で使われる「ら抜き言葉」への批判が多い点である。「ら抜き言葉」に関しては、文字に対する違和感(視覚的不快感)よりも、音声に対する違和感(聴覚的不快感)のほうが印象に残るのであろうか。ここで注目すべきは、「拒絶反応を起こす・品がなく略式に聞こえる・響きが嫌い・嫌悪感を覚える・耳障り・聞きたくない・耐えられない・なじめない」といった「ら抜き言葉」そのものに対する生理的な感覚、感情だけでなく、「日本語に見識を持っていない・内面の美が備わっていない・軽蔑する・軽薄・台無し・恥ずかしい・上品でない・残念・うんざりした」といった「ら抜き言葉」を使う人に対する感情的な批判が並ぶ点である。人が言葉を使うので、言葉だけでなくそれを使う人に対しても評価が及んでしまうのは仕方のないことなのかもしれないが、これほどまでに露骨な言葉を用いて攻撃するという点が解せない。長年「ら抜き言葉」が「日本語の乱れ」の代表格とされ、新聞紙面をにぎわしてきたのは、言葉に対する批判だけでなく、その言葉を使う人に対する批判、評価を伴う言葉だったからではないだろうか。そして、このような批判が「ら抜き言葉」を使うたびに新聞社やテレビ局にも容赦なく寄せられたのであろう。新聞社やテレビ局への批判は3-2で取り上げる。

続いて、「ら抜き言葉は方言なので使う」と肯定する意見と、他人の言葉遣いを批判する意見に対する反論を掲げる。方言だから使うとする肯定意見は、感覚的・感情的否定意見に対する直接的な反論ではないが、ここに掲載する。生まれたときから使っている方言や方言を使う人にとって、これらの感覚的・感情的否定意見は受容しがたいものがあると思われる。「独善的・排他的・自己中心・不寛容」という「ら抜き言葉」を否定する人に対する強い批判は、感覚的・感情的な否定意見に対する反論だと考えられるからである。

B：肯定意見

①「ら抜き言葉」は方言であるという意見

- ・大阪では祖母の代から受身「見られる」、可能「見れる」、尊敬「見はる」と意味が違えば形も変わる。分かりやすい。ら抜きが当たり前の自分にとっては、ら抜き批判は独善的、排他的で、方言札と同じにおいがする。(公務員 28歳 北海道 1992. 11. 30 朝日朝刊)
- ・私はら抜き言葉は本来的に存在しないと考える。「食べれる」は「食べられる」とともに異なる意味を担う二つの語法として、昔から広く使われ、どちらも欠かせないと思うからだ。「柿の実が赤くなった。もう食べれる。早う食べな。だれかさんに食べられるでよ」そう祖父母らに言われた70年前を思い出す。それは方言だから直さないといけないと私も弾劾されるだろう。標準語を否定する必要はないが、標準語は人工語。それが地方の在来語法、生活者の言葉を制限できるものではない。自己中心の、不寛

Oct. 2023

新聞記事にみる「ら抜き言葉」

容な、しかも間違った言説が大手を振るって流布する。何とも困った時代だ。

(自動車板金業 徳島県 2002. 2. 23 朝日朝刊)

②「他者の言葉遣いへの批判」を批判する意見

- ・日本語の乱れが言われて久しい。ら抜き言葉など古典的とも言えるもの。言葉の変化は歴史的に全く自然である。なのに、それを変化ではなく乱れと認識する。そう感じさせるものは何だろう？それは昔は良かったが今はダメという郷愁的懐古趣味とでも呼ぶべき感情だろう。その裏に、自分は立派だったが今の人間は駄目だという他者への軽視、自己の優越を持つ。そうして精神の平衡を得ている。その考えは窮屈だと思う。思考という名の宇宙を有限にすべきではない。

(高校生 17歳 鹿児島県 2002. 4. 22 朝日朝刊)

- ・ら抜きは審議会は公の場での使用は望ましくないとしたが、世論は割れている。言葉の乱れの主張が一番困るのは自分の使い方だけが正しいと信じて他を排斥する姿勢だ。言葉が変化するのは確かだ。日本語を守りたい、豊かで美しいものにしておきたいと願うならば、保守するだけでなく、変えざるを得ない変化の中で、より優れた機能や美しさを作り出す努力も忘れてはならない。

(水谷修 国立国語研究所所長 1996. 7. 14 朝日朝刊)

- ・言葉は客観的に存在している。本来、善悪、正邪で測るものではなく、好きか嫌いかでしか判断できない。批判は好みに合わない人が意見を述べているに過ぎない。嫌いだから間違っているというのは、好悪と正邪の混同である。ら抜きは戦前からある。今では日常語として定着している。日本語史的に言えば、意味が区別しやすいように日本語が一步進化したと考えることもできる。聞き手が間違った日本語だと感じたら、その時点でコミュニケーションも取れている。へんな日本語でも意思を相手に伝達するという機能を果たしている。(岩松研吉郎 慶應義塾大学教授 2001. 6. 21 毎日夕刊)

C：参考意見

- ・鈴木名誉教授は「ことばと文化」の中で次のように指摘している。「私たちが異なった文化に、しかも限られた範囲で接する時は…多くの場合自分が出会う一部…を一般的に拡大してしまう傾向があるということである。しかもこの一般化は必ず自分の文化の構造に従って行われるということが問題なのである」「自分」を「年長者」に、「異なった文化」を「若者言葉」に置き換えれば、「まさにその通りだ」と思うのは、私だけではないだろう。(1993. 9. 11 毎日朝刊)
- ・その(現在は言葉が乱れていると思う)正誤の判断基準になるのは、言語学で「個人言語」と呼ばれているものである。私たちは、一人一人が日本語という言語の使い手だが、世代や地域など、育った環境の違いによって語彙の種類や数が異なるし、言葉に関する知識や好みもまちまちである。これを個人言語と呼ぶ。(岡島昭浩 大阪大学教授 2016. 11. 16 朝日朝刊)

3-2 否定意見にみる批判の対象とその対応

次に、批判の対象とその対応について見ていこう。批判の対象は若者が多いと思うかもしれないが、最も多いのはマスコミである。参考までにおよその数を示しておく。批判の対象が明記されている130を超える記事のうち、マスコミが80以上と6割を超え、若者は3分の1強にとどまる。ただし、1件の記事の中に批判対象が複数あるものも少なくない。また、若者に関しては、「ら抜き言葉」を使うのは若者だけではないとする意見もあり、若者だけを批判する記事は5分の1以下に減る。

- ・言葉の園が荒れている。親や教育が悪いという人もいるが、マスコミの責任だと考える人が一番多い。もともと「着れる」「蹴れる」など語幹が1字の場合に誤用されやすかった。2字以上のものも影響してきた。新聞にも時々出る。これはミスだ。気がつく限り直しているが、直し切れないほど多い。学者

には許容説はある。しかし新聞はもうしばらくの間、頑固に原則を守らなければならない。

(1989. 4. 9 朝日朝刊)

批判と期待は表裏一体である。本来こうあってほしいという期待や希望があり、現実がそうならないから批判するのである。「ら抜き言葉」を否定する人は、何に対して批判や期待をするのか、批判・期待された側はどのように対応しているのか、という点を見ていくことで、「ら抜き言葉」を受容するか否かの理由や根拠が見えてくるのではないだろうか。

3-2-1 新聞記事

マスコミへの批判が多いので、当然のことながら新聞に対する批判も多いと考えられるが、驚くことに（これも当然のことかもしれないが）、新聞記事には新聞への批判はほとんど掲載されていない。マスコミを批判する80以上の記事のうち、テレビが9割を超え、新聞は約1割（テレビとの重複数件あり）に過ぎない。「ら抜き言葉は紙面に出ると必ず読者から指摘のハガキが届く（1994. 2. 1 朝日）」と記者が書くが、そのハガキの内容が掲載されることはない。それは新聞社への直接の抗議であって、投稿欄への投書ではない、ということなのか。3-1-2において「ら抜き言葉」に対する感覚的な否定意見には視覚的不快感よりも聴覚的不快感が多く見受けられたのは、このことも要因の一つかもしれない。

新聞を批判対象とする記事の多くは記者や校閲者等新聞社側の人間が書いた記事であり、批判というより社内の反省である。管見の限りでは、社外からの批判は次の3件であり、うち2件は同じ書籍の書評である。また、いずれの記事もテレビにも言及している。

- ・ら抜き表現が気になる。テレビのインタビューの中でもよく使われている。又、新聞紙上にもたびたび登場する。(美術ボランテア 1987. 4. 16 西日本朝刊)

- ・「ら抜き言葉」から妙ちくりんな若者言語まで、言葉の問題を取り上げだしたらキリがない。が、ともかくにも新聞、雑誌の見出しぐらいは、もっとまともな表現を、という本書の趣旨には大いに賛成。

(道浦母都子評・高島俊男『お言葉ですが…』1996. 11. 3 朝日朝刊)

- ・新聞もテレビも間違いだらけ。「我輩」の怒りは増すばかり。いわゆる「ら抜き言葉」の蔓延にはもううんざり。(書評・高島俊男『お言葉ですが…』1996. 11. 3 毎日朝刊)

新聞に対する批判記事がほとんどないからといって、新聞に「ら抜き言葉」が掲載されていないわけではない。上の記事にあるとおり「新聞紙上にもたびたび登場する」「新聞もテレビも間違いだらけ…ら抜き言葉の蔓延にはもううんざり」というほど掲載されているし、記者が書く記事における「ら抜き言葉」は校閲者が「直し切れないほど多い(1989. 4. 9 朝日)」とするほどなのである。

ところが、1995年に第20期国語審議会が「ら抜き言葉」を容認しなかった根拠の一つに「少なくとも新聞等ではほとんど用いられていない」ことが挙げられている。

- ・「ゆれ」は新たにできた別語形が従来の語形と併存する状態で、「乱れ」は各人の考える、日本語のあるべき姿からはずれたものを指す。しかし、従来の語形が大多数に支持されているときの別語は「誤用」とされる。一例が「ら抜き言葉」。審議会が「現時点では認知しかねる」とした理由に、新聞ではほとんど用いられていないことを挙げている。言葉遣いに対する新聞の責任は大きい。

(1997. 3. 13 毎日朝刊)

『お言葉ですが…』の執筆と国語審議会の審議がほぼ同時期である点が興味深い。「新聞もテレビも間違いだらけ」の状態だったが、国語審議会が新聞記事にほとんど用いられていないことを理由の一つにして『ら抜き言葉』を認めないことにしたのである。慌てたのは新聞社のほうだろう。国語審議会報告以降、各新聞社は『ら抜き言葉』を紙面に掲載しないよう校閲を強化したという自主規制⁶⁾があった。

新聞が「ら抜き言葉」を使わないよう規制する根拠は国語審議会報告のほかにもある。

Oct. 2023

新聞記事にみる「ら抜き言葉」

- ・ら抜き言葉は紙面に出ると必ず読者から指摘のハガキが届く。厳密に言えば間違い。話し言葉では市民権を得ているかもしれないが、書き言葉ではまずい。自分は「ら付き」言葉を徹底したい。国語は時代と共に変わっていくものという思いもある。一方で、学校で教わる用法と食い違う場合の読者の戸惑いも考える。(1994. 2. 1 朝日夕刊)
- ・新聞で使う言葉は辞書の例文などに採用されることもあるので変化に対し保守的な傾向にあると言われる。ら抜きもまだ許容していない。(1997. 4. 10 毎日朝刊)

これらの記事を読むと、新聞社自らの判断が先にあるというよりも、周囲に配慮して自粛している感が否めない。審議会の報告、読者の指摘、辞書の用例になること等が新聞社の「ら抜き言葉」を使わない根拠であり、規範意識を形作っている、と言えるのではないだろうか。

しかし、時代が進むとその根拠に変化がみられるようになる。

- ・校閲の際、ら抜き言葉にもよくお目にかかる。「られる」に接続するのが原則。ただ「見られる」を受身、「見れる」が可能とすれば混同しないとの意見もあり、辞書では「見られる」が正しいとしながらも「見れる」を載せているものも多い。「言葉は時代とともに変わるから、ら抜き言葉もOKでしょ」といった声もあろうが、書き言葉では本来の用法を守りたい。「時代の息吹」を伝える新聞も、会話文ではない地の文や見出しでは必ずしも辞書にあるからOKとはしない「保守派」なのだ。

(2013. 9. 4 毎日大阪朝刊)

辞書の用例になるから「ら抜き言葉」は載せない(1997. 4. 10 毎日)としていたが、「ら抜き言葉」を載せる辞書が増え始めると、辞書に載っても新聞は保守的に「ら入り言葉」を貫くという、自らの意思で掲載しないというように変化が見られる。

もちろん、新人記者の教育には昔も今も注力し続ける。

- ・若い人の「ら抜き言葉」の氾濫は当然新人の新聞記者にも及んでいて、彼らの原稿に時として登場する。直してはいる。だが、言葉遣いに敏感であるべき新聞記者がこの調子だと、20年ぐらい後に彼らがデスクになったとき、ら抜きが当然で、我々のほうがら入り言葉の使い手として特別視される事態になっているかもしれない。日本語表記に関して保守派である私はせつせと若手記者の原稿に手を入れている。(1998. 12. 5 毎日夕刊)

新聞社の努力の結果か、以下のような記事がある。

- ・カタカナ語やら抜き言葉は嫌いだ。いまや慣用語になってしまった感のあるら抜き言葉は、マスコミにその責任がある。新聞は正しい文法だが、テレビ、ラジオの中で堂々とまかり通っている。大人が正しい日本語を使うことによって、国の美しい言葉は永遠に受け継がれていくだろう。もう一度国語の勉強をし直す時期ではないか。(主婦 74歳 愛知県 2002. 2. 17 毎日愛知)

一方で、社内では昔も今も意見が割れている。

- ・ことばの文法的なゆれという、きまって持ち出されるのが「見れる」「出れる」「来れる」といった言い方である。いまではNHKのアナウンサーまで「サクラもようやく見れるようになりました」と使っているし、伊藤整、武者小路実篤などの文芸作品にも現れる。ことばの専門家たちはこの言い方を間違いと決めつけているわけではない。四段動詞の可能動詞を認めているのに、一段動詞の可能動詞を認めないのは理に合わない。音韻のうえでは「見れる」に不自然さを感じられるかもしれない。しかし文法的には「見れる」をまちがいはと言えない。(1977. 10. 11 朝日夕刊)
- ・国語審議会の「ら抜き」認めずは若者の言語生活に何の影響もない。「ら」を抜いて便利なら使うし、不便なら使わない。審議会から指示されるいわれはない。あくまでも目安であり、これを振りかざして日本語の乱れを言い立てない方が良い。学校の先生が授業で心がける程度にとどめるのが妥当ではないか。いくら流行語でも嫌になれば誰も使わなくなる。人もことばも時代とともにある。

(1995. 11. 12 毎日大阪朝刊)

・ら抜き言葉を使う人が使わない人を超えたというニュースを聞くといつも秋山基夫さんの詩が浮かぶ。「日本語は乱れているのがそれでいいのだからつくしいのだ」(2017. 5. 31 毎日大阪夕刊)

そして、結局のところ、30年ほど前に書かれた、以下の意見に落ち着き、長年この路線を変えずにいるのではないだろうか。

・校閲者の因果で、間違った言葉づかいを捨てておけない。けれどいったいどこから間違いなのだろう。「ら抜き言葉」への風圧もどんどん弱まっている。言葉の乱れには寛容でありたいが、一方で、校閲者は世間より半歩だけ保守的であるべきだとの思いがつきまとう。(1994. 1. 15 朝日朝刊)

この1994年の朝日新聞の記事の「保守的」という言葉が、社を越え時を越えて新聞業界で使われているようだ。上述した記者による記事のうち、毎日新聞の3つの記事(1997. 4. 10 毎日朝刊)(1998. 12. 5 毎日夕刊)(2013. 9. 4 毎日大阪朝刊)で「保守的」や「保守派」が使われている。

校閲者が世間より半歩だけ保守的であるべきだということであれば、どういう状況になれば使うようになるのであろう。「ら抜き言葉」が一段動詞の可能動詞として正式に学校文法に組み込まれるときまで、新聞社は「ら抜き言葉」を訂正し続けるのだろうか。

3-2-2 テレビ

次に、批判が最も多く寄せられているテレビを見ていこう。テレビが普及して間もない1960年代の記事にすでに批判が見られる。

・近ごろはテレビ・タレントがさかんに「来れない」などを使うようだ。テレビの国語を正しくするのも文士の仕事として多大な意義があるかも。(1967. 6. 5 東京夕刊)

・テレビの野球解説などでも平気で「見れないお客さんのために」なんてやっている。テレビは日本語教育という性格を帯びているのだ。こんな基本的な心得もない人がテレビに出れる(これは誤用)のは奇妙なことだと思う。(作家 1971. 11. 4 読売夕刊)

・言葉の乱れの元凶はテレビであると断定する人がいる。私もそれを否定するものではないが、確たる証拠がなければと思い、テレビを見た。そこで気の付いたものを並べてみる。…「見られる」「着られる」を殆どの俳優が「見れる」「着れる」と「ら」を除ってしまっている。(劇作家 1977. 2. 19 毎日夕刊)

・テレビCMはこの頃はすべて「ら」を取ってしまっている。食べられる、見られるという、とがめられるかもしれない。(劇作家 1981. 2. 27 朝日夕刊)

・最近の国語の乱れの原因はマスコミにあると言われている。「見れる」「出れる」のように、下手な助動詞の省略はアナウンサーによってつくられていく。情報に携わる人の自覚を望みたい。

(無職 73歳 三重県 1983. 8. 23 毎日朝刊)

・若者の間で使われている言葉は本当の日本語とはいえないのではないか。「ら抜き言葉」もその表れといえよう。言葉づかいでは視聴者の模範となるべきテレビやラジオのアナウンサーやキャスターでさえ「ら抜き言葉」を当然のように使っているのが聞き苦しい。言葉は時代とともに変わるべきか? それとも正しい日本語に戻すべきか。(元会社員 61歳 神奈川県 1987. 11. 10 東京朝刊)

・近ごろ、テレビやラジオを視聴していて、日本語の乱れが気になる。「れる」「られる」の区別がつかない者、…正しい日本語を話す手本であるはずのアナウンサーがこの有り様では!パイリンガル教育が叫ばれているが、母国語もまともに話せず何が国際人だと言いたい。

(自由業 30歳 東京都 1988. 7. 16 毎日朝刊)

・ニュースを読むアナウンサーが「出れる」「来れる」と言っているのを聞くと、がっかりする。授業に日常的な会話の勉強を加え、社会に出たとき恥をかかないよう正しい日本語を身に付けておくべき。

Oct. 2023

新聞記事にみる「ら抜き言葉」

(主婦 39歳 千葉県 1992. 4. 4 朝日朝刊)

・若者には当たり前になってきた「ら抜き言葉」。最近のトーク番組では中年タレントも平気で使う。ひどいのはCM。「しゃべれる, 食べれる, ミニ・ストップ」。テレビ界がら抜きを流行させている。ら抜きは業界では日本語になったのだろうか? 聞いている者はら抜きが当然と思い込んでしまう。

(会社員 60歳 板橋区 1992. 11. 3 朝日朝刊)

・耳障りなら抜き言葉が平気で使われている。テレビでもこれを使うコメンテーターが増えている。日本人が正しい日本語を使えないなんて残念でならない。(無職 59歳 奈良県 2006. 6. 5 毎日朝刊)

3-1-2 でみたとおりに、感覚的な意見が目立ち、「ら抜き言葉」だけでなく、「ら抜き言葉」を使う人に対する批判や評価も少なくないことがわかる。

また、民放のテレビ局はあまり名指しされないが、「標準語のお手本はNHKアナウンサー」と広く言われてきたNHKだからであろうか、NHKに対しては名指しで批判が浴びせられる。

・NHK『放送文化』に「見れる」が使われている。中年・高年のものがふつうに用いている「見られる」というコトバは「見れる」に席をゆずったのであろう。NHKもチンピラ語に市民権を与えたいらしい。

(1977. 5. 12 東京夕刊)

・最近テレビを見ていつもすんなり聞けないことがある。それは「見れる」「出れる」と言っていることだ。若い人だけでなく、中年の方もかなり多く、料理の先生、レポーター、大学の先生の話の中にでもあり、NHKでもよく聞かれる。自分が間違っているような錯覚さえ起こす。これから言葉を覚える子供たちが覚えてしまう。正しい日本語で話すよう心がけてほしい。

(主婦 42歳 埼玉県 1979. 2. 14 サンケイ朝刊)

・ら抜き言葉が気になる。よく耳にするのは野球解説者の話の中。先日はNHKのテレビニュースで「今夜、満月が見れると…」と地方局の女性アナウンサー。時代とともに日本語も変化していくのであろうが、せめてアナウンサーだけでもお手本になるような正しい表現をしてほしい。TPOをわきまえて正しく美しい日本語にこだわりたい、と自分への反省も含めて思う。

(無職 73歳 滋賀県 2003. 10. 2 朝日朝刊)

以上の記事を読むと、テレビにおける「ら抜き言葉」使用者は、アナウンサーはもちろん、タレント、野球解説者、俳優、CM、番組司会者、リポーター、コメンテーター、料理の先生、大学の先生など、ありとあらゆるテレビ出演者なので、「言葉の乱れの元凶はテレビ(劇作家 1977. 2. 19 毎日夕刊)」と言われてしまうのであろう。

批判の裏には、テレビに「正しい日本語」を求める人々がいる。「テレビは日本語教育という性格を帯びているのだ(作家 1971. 11. 4 読売夕刊)」に始まり、「言葉づかいでは視聴者の模範となるべきテレビやラジオのアナウンサーやキャスター(元会社員 61歳 神奈川県 1987. 11. 10 東京朝刊)」「正しい日本語を話す手本であるはずのアナウンサー(自由業 30歳 東京都 1988. 7. 16 毎日朝刊)」という「べき」「はず」論があり、「せめてアナウンサーだけでもお手本になるような正しい表現をしてほしい(無職 73歳 滋賀県 2003. 10. 2 朝日朝刊)」「新聞やテレビなどマスコミは日本語の乱れをもっと取り上げ、正しい日本語の使い方を国民に再認識させてほしい。(無職 69歳 千葉県 2006. 2. 28 読売朝刊)」と願う。

こうした視聴者からの批判と期待を受けて、アナウンサー自身も、「テレビで乱れたことばを使っている者の責任は重い(1987. 4. 24 朝日夕刊)」と自覚し、「間違いは間違いとして直さなければ。アナウンサーとして言葉の乱れに手を貸すわけにはいかない(1993. 9. 8 朝日夕刊)」、「『ら抜き言葉』は間違った日本語の代表のような言葉。アナウンサーは常にその時代の正しい日本語を使わねばならない(2000. 12. 22 朝日福井朝刊)」という自負も抱く。また、テレビ局も「番組の言葉遣い等をチェックする審査局を設置したり、気になる言葉遣いの冊子を作成して配布したりしている(1993. 9. 8 朝日夕刊)」

等の対策をしつつ、アナウンサー教育に力を入れる。これは、新聞社が若い記者教育に尽力していたのと同様である。

教育する側の先輩アナウンサーは「ら抜きは許しません(1993. 9. 3 朝日朝刊)」と意気込んだり、「若手もら抜き言葉を日常生活から直そうと意識しているようだ(1993. 2. 6 読売夕刊)」と優しい視線を注いだりするが、「新人アナウンサーの研修で、ら抜きを1回使う度に100円募金することにしたら数日で8千円近くに上った(1993. 8. 12 読売夕刊)」という状況である。当の若手アナウンサーは『日本語の先生ではないので、伝わればいい』『新入社員のうちはら抜きを使っているけど、経験を積めば自覚が芽生える』(1993. 9. 22 朝日朝刊)」とおおらかである。

テレビ局がどのような基準にもとづいて、批判に対応しているのか、その基準が示されているのが次の記事である。

- ・NHK放送文化研究所は、どの放送局も「ら抜き言葉」を認めていないのは、まだこの変化が十分組織的なものになっていないためと説明している。新しい言い方を認める基準として7、8割の支持が得られることを一応の目安としている。より多くの視聴者に支持される表現を探り出すのは非常に困難なため、各放送局とも「実態より半歩遅れていく」ことが現実的な選択と認識している。

(1993. 2. 6 読売夕刊)

この記事から、テレビは視聴者の支持を規範としていることが分かる。新聞の読者の批判同様、視聴者の批判によって自主規制している、と言えよう。しかも、「実態より半歩遅れていく」という対応も新聞社の「校閲者は世間より半歩だけ保守的であるべきだ」との思いがつきまとう。(1994. 1. 15 朝日朝刊)」と同様である。

ところで、この記事にある「7、8割の支持」というのは、視聴者の支持ということはわかるが、どのような支持なのか不明である。この点に関しては塩田(2009)が「NHKで『ら抜き』を使わない理由」として、日本人は「自分は『ら抜き』で話すけれども、放送には決して『ら抜き』を使わない話し方を期待する人が、きわめて多いのだ』『ら抜き』を使うのは、現時点では『NHKらしくない』と考えられている」と説明している点が答えになるだろう。塩田(2022)によれば、NHKに「ら抜き言葉」を使わない話し方を期待する人は1996年に66%、2013年に68%だったが、2021年には43%に減少している。その一方で、NHKが「ら抜き言葉」を使ってもかまわないとする人の割合は2021年でも23%に過ぎない。この記事でいう「7、8割の支持」とは、NHKが「ら抜き言葉」を使うことを支持する人が視聴者の中の7、8割になったら、NHKも使う、ということなのだろう。まだまだ先が長そうである。

また、出演する側もNHKに出演する場合は嫌でも意識するようである。

- ・NHKなので言葉遣いや『ら抜き言葉』には気を付けています。(棋士 2017. 4. 14 毎日夕刊)
- こうした努力の成果か、以下のような記事がある。
- ・マスコミや広告界に罪ありと思わせられることがある。おかしな言葉の発生源になっていることがあるからだ。特にワイドショー担当者などは責めを負わねばなるまい。NHKはさすがにら抜き言葉を口にしていないが、民放では崩れもみられ、CM作者もお先棒を担いでいる。日本語を乱してはならない。(著述業 77歳 神奈川県 1999. 12. 2 毎日朝刊)
- ・ら抜き言葉はNHKは別にしても民放の素人同然のリポーターなどは当たり前前に連発している。耳障りで、内容など聞きたくないほど。電波で流され定着するのを憂う。美しい日本語を使ってこそ内面の美が備わる。時代遅れなのか。(主婦 60歳 千葉県 2000. 3. 31 朝日夕刊)

なお、現在のテレビは、実際の映像における発話に字幕(テロップ)を付けて流す番組が多いが、多くの局で、発話の「ら抜き言葉」を字幕では「ら入り言葉」に訂正して放送している。これも批判に対する対応の一つであろう。このような対応で「ら抜き言葉」を批判する視聴者が良しとするのか疑問である

が、以下のような記事がある。

- ・日常会話では「ら抜き言葉」が定着し、ほとんどの人が使っているが、テレビの字幕はらが入った表記なのでうれしい。(公務員 54歳 長崎県 2009. 9. 15 毎日朝刊)

最近テレビで見た字幕では、間違えた敬語が使われているのに「ら抜き言葉」だけは直されていた。方言や本来日本語にはない表記なども話し言葉にかなり忠実に使われているのに「ら抜き言葉」は訂正される。視聴者からの批判がいまだに多いのだろうか。字幕の訂正に「うれしい」と思う人がいまだにいるのだろうか。テレビ局は「ら抜き言葉」をいつまで字幕で訂正し続けるのだろうか。話し言葉において「実態より半歩遅れていく」というのは、NHKが「ら抜き言葉」を使ってもいいとするは支持者が7, 8割になるまで使わないことであると理解したが、字幕についてはいつどのような判断がなされるのか、興味深い。字幕による訂正には、ワープロソフトの訂正同様に、規範意識を醸成する一面がありそうである。

- ・パソコンで「来れる」等と打つと「ら抜き表現」と表示される。テレビでら抜き言葉を話す字幕で訂正される。文法上のルールに則っている。しかし、私は「着れる」など語幹の短いものは認めてもいいと考える。(公務員 52歳 大阪府 2010. 7. 16 朝日朝刊)
- ・まだそれは認めないよとテロップでら抜き言葉が直されており(東京都 2021. 4. 19 読売朝刊)

4. おわりに

本稿では、新聞における「ら抜き言葉」に対する人々の批判記事について調べ考察した結果、以下のことが分かった。

- ①「ら抜き言葉」に対する人々の批判がどのような根拠に基づいているか。

人々の批判の根拠は大きく2つある。1つは学校文法であり、もう1つは個人の好みである。学校文法を根拠とする人は、「ら抜き言葉」は正しくないと批判し、個人の好みを根拠とする人は、「ら抜き言葉」は感覚的に受け入れられないと批判する。また、後者の場合は「ら抜き言葉」に対する批判に終わらず、それを使う人に対する感覚的、感情的な批判や評価につながりやすいことがわかった。そして、このことが「ら抜き言葉」を必要以上に日本語の「乱れ」の代表格に押し上げてきたのだと思われる。

- ②批判の対象は誰で、どのような批判なのか。

批判の対象は多岐にわたるが、圧倒的にマスコミが多かった。「ら抜き言葉」を使うとテレビ局にも新聞社にもすぐに視聴者や読者から批判が届くようだが、新聞記事には新聞社への批判はほとんど掲載されていないことも判明した。新聞記事における批判の対象は、テレビに集中している。批判の内容は上述の①の通りで、「ら抜き言葉」を使う人に対する感覚的、感情的な批判や評価も少なくない。また、テレビを代表するアナウンサーに対する批判は、模範となるべきだから、正しい日本語を使ってほしいという期待の裏返しによるものも少なくないことが見えてきた。

- ③批判の対象者は批判に対し、どのように対応しているのか。

テレビ局や新聞社の対応は共通している。「実態より半歩遅れて行く」という保守的な対応である。筆者が採取した新聞記事からはテレビに対する視聴者の批判がいかに多く、厳しいものだったかは容易に推測できる。テレビ局は視聴者が、新聞社は読者が一番の「お客様」であるので、保守的な対応をとるしかないのであろう。一方で、範を示すべき、という自負もあろう。しかし、2023年現在は少なくとも新聞記事には感覚的、感情的な批判はほとんど掲載されていないことから、テレビ局や新聞社に向けられる批判の量も以前ほどではなくなっているのではないだろうか。今後はマスコミがいつまで半歩遅れていくのか、注視していきたい。

最後に、人々の規範意識について触れておこう。言葉は変化するものだという考えが広まったからか、

「ら抜き言葉」を批判する新聞記事は激減している。それにもかかわらず、新聞は「保守的に」「ら入り言葉」を使い続け、テレビは「半歩遅れて」音声とは乖離した字幕で「ら入り言葉」を使い続けている。このことが、かえって人々の規範意識に影響を与えているのではないだろうか。マスコミの、この対応はワープロソフトの添削機能とともに、「ら抜き言葉」が自然に広まるのを抑制する大きな要因になっている、とは考えられないか。この点については稿を改めたい。

注

- 1) 「朝日新聞聞蔵Ⅱビジュアル」の検索画面には「1985年～」と書かれているが、実際には1984年8月からの記事が掲載されている。しかし、今回の検索の結果、1984年8月から12月の間の記事は出てこなかったため、ここでは検索画面通りの1985年～とする。また、本データベースは、2022年3月から「朝日新聞クロスサーチ」を並行稼働している。本稿のデータは2022年2月末までを対象としたため、「聞蔵Ⅱビジュアル」を利用したが、本稿執筆時のデータ確認の際は「クロスサーチ」も利用した。
- 2) 「ことばに関する新聞記事画像データベース」は、「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」以外に「東京新聞」「産経新聞(サンケイ)」「西日本新聞」等を掲載する。検索結果記事数は109件であったが、そのうち、このデータベース上に画像があり記事が読めるものは44件であったため、それ以外の記事は国会図書館の新聞記事データから得た。また、新聞三社のデータベースと重複があるものは各新聞社の記事として統一している。なお、このデータベースは「ことばに関する新聞記事見出しデータベースDL版」として、新聞記事の見出しを検索できるようになって2009年まで延長されているが、本稿では「ら抜き言葉」という用語が確立する1980年代までの新聞記事情報が必要だったため、DVD版を利用した。
- 3) 全部で6本。すべて朝日新聞である。6本のうち、3本は1984年以前の記事であり、これらを探す際には「朝日新聞縮刷版」を利用した。
- 4) 「ら抜き言葉」という言葉がいつどこで誰によって使われ始めたかについては、1981年1月13日の毎日新聞が最も早い時期のものだとする説がある(塩田 2013 p.33)。今回の検索結果を見ても、その記事が「ら抜き言葉」を使った最も早い記事である。一般の人からの投書なので、その人の造語なのか、新聞社のほうで作ったものなのかは不明である。
- 5) 平成20年度『国語に関する世論調査』によれば、「ら」抜きの形である「来れる」については、「言葉の変化」だと考える人が41%と最も多く、過去の調査結果(平成13年度調査)と比べて9ポイント増加している、ということである。
- 6) 新聞社の自主規制に関しては、中山(2017)を参照されたい。

参考文献

- 塩田雄大(2009)「NHKで『ら抜き』を使わない理由」『放送研究と調査 JULY 2013』117ページ。
 塩田雄大(2022)「ふだん“寝れない”と言う人が7割～2021年『日本語のゆれに関する調査』から(2)～」『放送研究と調査 FEBRUARY 2022』30-47ページ。
 第20期国語審議会(1995)「新しい時代に応じた国語施策について(審議経過報告)」
 中山恵利子(2017)「言葉の規範意識を再考する－『ら抜き言葉』と国語審議会」『阪南論集人文・自然科学編』53巻1号、1-20ページ。
 文化庁文化部国語課(2008)『平成20年度 国語に関する世論調査』14-17ページ。
 文化庁文化部国語課(2020)『令和2年度 国語に関する世論調査』32-42ページ。

新聞記事データベース

- 朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」「朝日新聞クロスサーチ」
 毎日新聞社「毎日新聞記事検索」
 読売新聞社「読売新聞ヨミダス歴史館(明治・大正・昭和/平成・令和)」
 国立国語研究所(2009)「ことばに関する新聞記事画像データベース」(DVD版)

(2023年7月14日掲載決定)